【議員インターンシップ出身議員に聞く】

政治家への志を後押ししした議員インターンシップ

NPO法人ドットジェイピー理事／
柏原市議会議員
友田 景 氏
Tomoda Kei

1976年大阪府生まれ。流通科学大学商学部卒業。学生時代には、財団法人AFSのボランティアスタッフとして活動。卒業後、テニスインストラクターをする傍らテニス日本ランキング（JOP）を取得。その後、福祉法人ちとせ保育園で研修をしながら、ドットジェイピー第5期インターン生として、久保田暁元堺市議会議員の下でインターンシップを行う。2001年、柏原市議会議員選挙にてトップ当選。2005年、柏原市史上初の連続トップ当選&過去最多得票にて再選。現在、NPO法人ドットジェイピー理事や追手門大学非常勤講師も務める。

インターンシップで強まった決意

―― 友田議員はNPO法人ドットジェイピーの議員インターンシップに参加された後、大阪府柏原市の市議会議員に就任されました。まず、なぜ議員インターンシップに参加されたのか、その経緯からおうかがいします。

友田 議員インターンシップは現在、大学生を対象に行っているのですが、私の場合は大学卒業後にインターンに参加しました。そのときは既に、議員になろうと心に決めていました。

私はもともと、議員活動というよりも人が成長するプロセスに興味がありました。したがって、就職活動の際も、子どもを対象に事業をしている企業を中心に回ったのです。しかし、残念ながらそのような企業からは内定をいただくことができず、学生時代からテニスのインストラクターとして働いてきたテニスクラブで、子ども向けのスクールなどをして働いていました。

あるとき、小学校3～4年生くらいのクラスの子どもが、急に言うことを聞かなくなったり、ボールを拾わなくなったりしたことをきっかけに、もっと小さな子どもの現場を見たくなり、半年間ほど保育所でインターン生として働きました。そこで、世の中には幼稚園と保育所という別々の組織があり、同じ3歳児でも、そのような別々の組織に入れられたり、それぞれに異なった規制があったりするという実態を目の当たりにしました。そこから、結局は政治が機能しないと、国としてきちんと子どもを教育することはできないのではないか、という問題意識を持つに至ったのです。しかし、どうすれば政治家になれるのかが分かりませんでした。そのとき、新聞記事を見てドットジェイピーの存在を知ったのです。コネなし、カネなしでも議員になった人もいるということを知り、まず「どうやったら議員になれるのか」、そして「なぜ今、日本の政治はこんな状況なのか」、この2点を知りたくて、インターンシップに参加したのです。

―― インターンシップでは、どちらの事務所でどのような経験をされたのですか。

友田 当時32歳だった大阪府堺市議会議員の事務所に行きました。「堺市をこうしたい」という情熱を持って活動されていた方で、まずその姿を見たときに「堺市の市民は幸せだなあ」と思いました。当時、私はあまり市議会議員を知りませんでしたが、このように情熱のある人を見かけたことがなかったのです。「このような政治家がいること自体、市民が幸せなのだ」ということに気が付き、またその議員からも、「政治は人がやるものだから、議員としてよりも人としてどうあるべきかが大切なのだ」ということを教わりました。単に制度を構築するのが政治家の仕事ではなく、市民がその制度をきちんと実行できるようにするために、いろいろな活動をされている。そのような真摯な姿に感銘を受け、素直に「カッコいい」と思い、「自分もこういう人になりたい」と強く思うようになりました。

まずは情報公開から

―― その後友田さんは、柏原市議会議員に立候補されてトップ当選を果たすわけですが、どのように選挙を闘われたのですか。

友田 私は、政策的なことはほとんど訴えかけませんでした。ただ、市民の皆さんに問いかけたのです。「皆さんは4年前に一票を投じた議員が、4年間何をしてきたのかご存じですか。私は知りませんし、そのような人には二度と票を投じたくありません。皆さんは、また同じ人に票を入れるのですか。それでこのまちは良くなるのでしょうか。それで政治は機能しているのでしょうか」、そして「私は選挙で当選しても、ここでマイクを持って話します。今、何を何のためにやっているのか。そして、市内全戸に報告書を配ります」、そのような話をしました。もちろ

ん、いくつか政策的なこともありましたが、主な内容は以上のことに尽きます。

結局、現状の政治に対する不満が募っていたのでしょう。柏原市という歴史ある地域でしたし、若くて無党派の議員は他にいなかったということも追い風になりました。また、自分に票を入れてくれる層をマーケティング的な手法で明確にターゲッティングして、その人たちに受け入れられるような服装や髪型などを意識して闘いました。

―― 実際に議員になられて、自分がやりたいと思っていたことを実現することはできましたか。

友田 なかなか難しいですね。特に、私が立候補した当時の柏原市の市長は、8期32年も務められた実力のある方でしたので、私のような新人で野党側の議員の言うことなどほとんど聞いてもらえず、まさに何もできないという状況でした。ただ、先ほどお話ししたとおり、活動報告をしている議員がほとんどいない中、私は市民に活動内容を報告し、さらに情報公開ということで、地元の病院の赤字経営の実態などを市民の皆さんにお知らせして、徐々にですが市民の問題意識を高めていくことに力を入れました。それをやらないことには、状況は変わらないと思ったからです。今すぐ何かをやることに力を割くのではなく、中・長期的な視点で大きく動かせるようなことを考えようと思ったのです。今は、そのための布石を打っているという段階です。

―― 議員になられた動機は子どもの教育問題だとうかがいましたが、そのことに関して何か活動されていることはありますか。

友田 柏原市には大阪教育大学という国立系大学法人がありますから、優秀な教員の卵や教授といった人材がたくさんいらっしゃるわけです。そこと連携して、幼稚園、保育所、小中学校の授業などを一緒にやっていくプランの策定を進めています。例えば、商店街の空き店舗を利用して、ミニ児童館的な場所をつくり、そこで大学生や地元の方と小中学生が触れ合えたり、勉強で分からないところをおさらいしたりすることができる。そのような場を設置するための事業は、もうすぐ実施するところまで来ています。

―― 選挙に関して、議員生活を通して学んだことはありますか。

友田 私たちは、選挙を通してでしか政治を変えることができないのですが、今、若い人の投票率が下がっている最大の原因は、議員が投票してくれた人の、いわば「顧客満足」を満たしてこなかったことにあると思います。ですから私は、パフォーマンスと言われようが「お客さんが喜ぶ政治をしよう」、すなわち「市民が喜ぶ政治をしよう」と常に心がけています。

コストパフォーマンスの低さが地方議会の最大の問題

―― 実際に市議会議員になられて、現在の地方議会が抱えるさまざまな問題点や矛盾を見てこられたと思います。地方議会に対して、どのようなお考えをお持ちですか。

友田 4年間議員を務めてきて実感したことは、市長と議員の両方を市民が直接選挙で選ぶ二元代表制は、もはや限界に達しているということです。

現状を見ると、地方議員の多くは兼業です。他に職業を持っていて、片手間に議員活動も行っているわけです。ところが「地方のことは地方で」という時代背景があって、しかもIT問題やゴミ処理に関する環境問題などといった大きな問題が山積する中、そんな片手間の議員で、一体誰が本当にそのようなことについて理解しているのか、という問題が生じているわけです。会社に例えれば、執行権を持たない外部の取締役のようなもので、いろいろな事に関してYesかNoを言うだけで、新しい提案も何も出てこない。自分の選挙区の住民が「公園がほしい」と言うと、「公園をつくれ」と言うだけで、その予算をどう捻出するのか、どうやって公園をつくるのか、そのようなことは何も言わない。というか、言うことができない。そんな議員であるなら、必要ないのです。区長とか町内会長で十分です。わざわざペイを支払う価値もありません。

それならペイを支払う価値がある、いわゆるプロとは何か、ということになります。住民と同じ意識ではよいはずがありません。われわれ議員は、住民の代表ではないのです。議員は住民という株主から選ばれた、いわば経営者のようなものです。プロとしての責任を持たなければなりません。ところが、現状では兼業議員が多い。彼らには、そうしたプロとしての意識や責任感が不足しているのです。

それを変えていくためには、二元代表制ではなく議員内閣制にして、議員に執行権を持たせることがひとつの手法だと思います。それから、議員の数をもっと減らす。その代わり待遇を良くして、きっちりと活動することのできる専業の議員にする。そのような改革を進めていかないと、地方議会のコストパフォーマンスは一層悪くなると思います。それに加えて、現状は1,200万人いる東京都と人口5,000人の村が同じ仕組みであり、例えて言えば、一部上場の大企業と零細企業が同じ仕組みで動いているようなものです。当然のことながら、それでは非常に無駄が多い。とにかく意思決定までにコストがかかりすぎる。これが地方議会の最大の問題です。私はまだ若いですから、そのような問題点を踏まえ、これからも良い政治を実現できるよう、さらに努力していきたいと思います。

plus α
友田景氏オフィシャルウェブサイト
http://www.kashiwara.org/

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。
h-bunka@lec-jp.com